

マルコによる福音書 10:13～16

「子供のように信じる心」

2025年6月1日(主の日)

藤沢北教会 長倉基

主イエスは、子供たちを抱き上げて、手を置いて祝福なさいました。子供たちを神の国へ招き入れられたのです。恵みあふれる光景です。これが神の国の姿です。主イエスは、わたしたちも同じように、抱き上げて手を置いて祝福してください。祝福に招いてください。子供たちは、親に連れられて促されるままに、何よりも主イエスに招かれるままに祝福されました。わたしたちも、同じように、親あるいはさまざまな人生の経験から送り出されて主イエスの前に立ちます。主イエスが招いてください。主イエスがくださろうとする祝福をそのまま受け取るのがわたしたちの信仰です。「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」という言葉で主イエスがおっしゃりたいのはこういうことだと思います。「子供のように受け入れるだけで、神の国に入ることができるのだ。あなたにもこの祝福に与ってほしい」。

ところが、弟子たちはこのことが分かっていませんでした。子供たちを連れてきた人々を叱ったのです。「こらこら、先生の邪魔をするんじゃない。ここは子供たちの来る場じゃない。向こうへ連れていきなさい」。わたしは大人と子供の集会を分けています。大人の集会に子供が入ってきて、うるさくしたら、こんなあからさまにはいいませんが、別の場所で過ごすようにと準備をして出ていってもらいましょう。これは集会としては適切な準備、判断だと思います。ここで語られていることはそうではないのです。単なる集会の話をしているのではないのです。主イエスのもとに来る、主イエスに触れていただきたい、祝福をいただきたいと願ってやってきたこの人たち、その子供たちを、弟子たちが妨げてしまったのです。「今、大人たちは神様の恵みの言葉を聞いているんだよ。でもこれは大人用なので、あなたたちはあっちにいてなさい」などと言うのでしょうか。次週はペンテコステの合同礼拝です。子供たちと礼拝をします。いっしょに御言葉を聞きます。これが主イエスが求めておられることです。けれども、わざわざ言う必要もないかもしれませんが、普段の礼拝においても、わたしたちは子供がいても構いません。歓迎しています。課題としては、子供がよく礼拝し、よく御言葉を聞くことができる礼拝、説教になっているか、ということはあるでしょう。しかし、もともとわたしたちは主日礼拝は大人と子供を分けていないのです。けれども、昔から主日礼拝のことを「大人の礼拝」という習慣がありますが、これは十分に注意すべき言葉です。子供たちは、「あ、自分たちは言ってはいけないのだな」、ということにすぐ気づきます。名前の問題ではなくて、わたしたちがそう思っているということを敏感に聞き取るのです。

主イエスは、ご自分のところに来ようとした子供たちを退けた弟子たちに対して憤られました。これは大変めずらしい表現です。憤慨とも訳されますが、あまりでてこない表現です。主イエスが憤られたのはさらに少ないのです。(ヨハネ 11:33 は別の単語。こち

らの方がはっきりと怒りの感情を表す)。いくつか見てみます。神殿で「ダビデの子、ホサナ」と子供たちが歌っているのをきいて祭司長律法学者が怒った。ベタニアで女性が高価なナルドの香油を壺ごと主イエスに注いってしまった時、そこにいた人々は「もったいない。売って貧しい人にほどこせばよかったのに」と憤慨しました。この後出てきますが、ヤコブとヨハネが「イエス様あなたが王の座にお座りになるときがきたら、わたしたちを右と左に座らせてください」と頼んだ時の、ほかの10人の憤り。安息日に癒しをなされたのを見たか会堂長が怒りました。共通していることは、(あくまでも)自分にとって、間違っている他人の言動を見たときの感情です。自分が最も大切にしていたこと、それは貧しい人に施すことであり、律法を守ることであり、神を冒瀆しないことであり、自分が弟子の中で一番偉いことであり、内容はさまざまですが、それが犯された(やぶられた)時に起こる勘定であり、だまっていられないものです。その意味では主イエスも同じでした。ご自分のところに子供がこうとしている。それを受け入れて祝福することは主イエスにとって当然であり、一番大事なことだったのです。それを弟子たちが妨げた。だから憤られたのです。子供を祝福する。主イエスが最も大切になさっていることです。

子供については少し前に語られました。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」。子供を受け入れることは簡単ではありません。子供とは純粹無垢な存在とか、天真爛漫とか、従順とか、そういう意味ではないからです。わたしたちは自分に都合のいい子供、理想の子供は受け入れるけれど、そうではない子供はそうのように変わることを求めます。素直で、落ち着いておとなしく座り、大人の話をよく理解する賢い子。今そうではない子供たちもいつかそうなる、そう望んでいます。けれども主イエスはそうはおっしゃいませんでした。素直なよい子だけを受け入れなさい、ではなく無条件にすべての子供を受け入れなさい、とおっしゃったのです。その子がいい子になることが期待できないような現実を見るかもしれませんが、それでも主イエスのもとにくることをさまたげてはならないのです。もちろん、ほかの子供の安全がおりやかされるような形で受け入れるわけにはいかないこともあるでしょう。それでもなお、さまたげることは許されない、気に入らない人、合わない人とは付き合いをやめるのが当たり前のこの世の中であって、愛をもって接することが求められます。主イエスの言葉に生きようとするわたしたち信仰者の課題、悩みです。

さて主イエスは「妨げてはならない」とおっしゃった後「神の国はこのような者たちのものである」とおっしゃいました。大人が子供を受け入れるかどうか、どころか、神の国はこのような子供のような者たちのものである、と主イエスはおっしゃいます。わたしたちはどうも自分たちが神の国の番人で、どの子供を受け入れるかどうか決める権限がある、などと勘違いしていたようです。そうではなくて、このような者、子供のような者たちに神の国が与えられるのです。子供こそが神の国を受け入れているのだ、と。

子供は、自分が一人では生きていけないことをしています。そのために赤ちゃんはお腹が空いたら泣き叫び、小さい子は大人に対して甘える仕草をし、もう少し大きくなると

大人を見定めるような行動をします。ずるがしこくなれ、というのではないでしょう。けれども、自分が、助けなしには生きていけないことをよく知っているということです。神の国なしには生きていけないことを認めること、それが神の国を受け入れるということです。ですから、子供のように神の国を受け入れる、とはあの純粹だった子供時代のように素直な心を取り戻そう、などということではないのです。受け入れることは受け入れられることです。そのことを認めることです。とても神の国にふさわしくないとされるこの自分が主イエスによって神の国へと招かれているのです。主イエスが、「子供を妨げてはならない。ずる賢く、大人を試す、自分勝手なそういう子供もわたしは招いているのだ。神の国なしには子供たちは生きていけないのだから」、とおっしゃる。そうであれば、主イエスは同じように、ずる賢く、人を試し、自分勝手な、そういう大人であるわたしたちをも招いてくださっているはずです。いえ、主イエスのまなざしの中では、わたしたちもまったく同じ子供でしかないのです。「わたしはあなたたちをまねく。あなたたちがわたしのところに来るのを、だれも誰もさまたげてはならない、だれかが妨げるなら、わたしは憤る。あなたも神の国なしには生きていけないのだから。」もちろん、わるい人間でいいのだ、などとひらきなおっていいわけではありません。けれども、わたしたちはどこか自分がちゃんとしているから受け入れられる、あれやこれやのいいこと正しいことをしているから受け入れられているという思いがあるものではないでしょうか。それは自信と言ってもいいかもしれないし、時に不安のあらわれでもあるかもしれません。本当の自分を知られたら、とても受け入れられるとは思えないから、せめていくつかのことはちゃんとしよう、そういう姿を見せればなんとかなるのではないか、と思うのです。けれども、神はわたしたちの全てを、その心の奥底まで知っておられます。知っていてくださるのです。すべてわかったうえでわたしたちを招いてくださるのです。

そのままのわたしたちを招いてくださいます。妨げるものがあるならば、怒りをあらわにし、それをとり除いてくださいます。なぜならば、神の国は恵みだからです。神が一方的にくださる賜物だからです。わたしたちはどうして自分から神の国を受け入れることはできない、神の国に受け入れられるにふさわしいものではありませんでした。招きを無視し、他の別のものに救いを見て、神など必要ないとすら言うような者でした。ずる賢い、などという程度のものではなかったのです。この神の国への向かうことを妨げるのは、何よりも罪でした。自分から招きをむげにするほどひどい妨げです。主イエスは、この罪にたいしてお怒りになりました。そして、この妨げを取り除いてくださった。責任をわたしたちに問うのではなく、ご自分が神の招きから、神の国からもっとも遠いところ、十字架に赴かれ、そこで罪もろともご自分を十字架の死にいらせたのです。ですから、今や主イエスの招きを妨げるものはありません。

昔、日本に日曜学校の運動が入ってきた時、「日曜学校はこどものしつけにいいから送りだしなさい」という誘い文句があったそうです。今では考えられません。わたしたちの教会学校は、行儀よくさせるしつけのために行っているではありませんし、大人が何か

を知っていて、それを教える、というような狭い意味での教育ではないのです。大人ができることと言えば、神に受け入れられている者として礼拝で神の前に立たされている姿を見せることだけです。受け入れられたことを知る信仰者は、心から賛美をし、祈りをささげ、御言葉を聞きます。教会学校には御言葉を語る務めもありますが、それも、自分がいかに受け入れていただいているか、その意味で自分がいかに主イエスの救いを受け入れているかを語るだけなのです。主イエスに赦されて、受け入れられて主の恵みに生きることがどれほど幸いなことか。受け入れられている幸いを分かち合うのが教会学校です。それは、主日の礼拝、わたしたちの生活も全く同じです。主イエスが招いてくださる人とともに、恵みの中、礼拝をし、祈る生活をする、それがわたしたちの伝道となるのです。伝道とは勧誘したり、勧誘とまではいわなくても誘ったり、あるいは説得したりすることではありません。わたしは主イエスに招かれて恵みの中に生きている、あなたも招かれています、と自分の生活、人生を見てもらうことです。聞いてもらうことです。わたしたちはそういう意味でいつも伝道している「伝道の生活」をしているのです。

そして、受け入れていただくという恵みを知ったとき、わたしたちは主イエスの福音を受け入れることになります。受け入れることと受け入れられることは一体なのです。

わたしたちは、身体的にも精神的にも子供ではありません。けれども、神の前では今もなお、助けを必要とする者、招かれなければ神の国に入れない者、ただ受け入れていただくしかない子供です。主イエスは、そんなわたしたちを見つめ、「来なさい」、神の国はあなたのものだ、と言ってくださいます。そして、妨げられることなく、御前に出ることができるようになってくださいます。受け入れられていることを知って、ただ受け入れる。それが、子供のように神の国を受け入れるということなのです。主の招きをお受けしたいと思います。主イエスは、わたしたちを抱き、祝福してくださいます。